

---

# うそつき

麻未夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うそつき

### 【Nコード】

N98240

### 【作者名】

麻未夢

### 【あらすじ】

この町で知らない者はいない、『うそつき』の舞。今日も彼女は警官相手に、ありもしない嘘を並べ立てる。

舞は、嘘つきだ。この町に、それを知らない者はいない。

ある日、舞はいつものように嘘を吐いた。

「公園に、お金がいっぱい詰まった鞆が落ちていたの」

この町の交番に新しく赴任したばかりの若い警官は、舞の言葉を鵜呑みにした。

詳しい話を聞こうと身を乗り出す若い警官に、舞は気を良くして、更に嘘を重ねる。

「周りに血の痕があったわ。だから私、怖くてあまり近くには寄れなかったの」

大金と血痕、その二つが結びつけば、これは大事件だと考えて間違いない。

警官はさっそく、そこに案内してほしいと舞に頼んだ。

勿論、舞は快く頷いた。

道すがら、舞はふと足を止めて路上に止めてある車を見る。

どうしたのかと警官が尋ねると、

「この車、最近いつもここに止めてあるの。……もしかしたら、あの大金と何か関係があるのかしらね」

そんな舞の言葉を、またもや警官は鵜呑みにした。

ちょうど駐車禁止区域である。警官はすぐさま、署に不審車両発見の旨を知らせて、ついでに反則切符を切った。

それから、改めて公園に向かって歩きだした二人だったが、またもや舞が足を止めてしまう。

「あの看板、あんなに道にはみ出してるけど、前からああたったかしら。もしかしたら、大金と関係のある人が、人目を避けるために、

身体を隠す場所をあやつて準備してるのかも。ほら、あそこも」

舞は周囲を見回し、警官も彼女の視線を追うように周囲を見回すした。

なるほど、確かに看板がやけに道にはみ出して置かれている。

一応、店主たちに確認を取ってくると言って、警官は舞を残してそれぞれの店に入っていた。すると、店主たちは一様に、自分が出したのではないと言い張って、慌てて看板を道にはみ出さないよう置き直し始める。

それを確認して、また二人は公園へ向かって歩き出した。

「あつ……」

舞が不意に声をあげる。何事かという警官の視線に応え、舞は道に設置されているカーブミラーを指さした。

「あんな角度じゃ、あの横道に誰かがいても、ドライバーから死角になるんじゃないかしら。きっと、お金に関係のある人がやったのよ」

それは一大事とばかりに、警官はすぐさま署に対し、すぐに担当者を寄越して、ついでに周辺の他のミラーについてもチェックするよう連絡をつける。

そして、ようやく二人は公園にたどり着いた。

「この公園、周りを木で囲まれてるから、昼間でも外からは中で何が起こってるのか解らないのよね」

大金と血痕に絡んだ何かは、そういう公園の状態を見越して行われたのだろう。

木の伐採や街灯の設置については、さすがに警察の管轄ではないと思いながらも、防犯上必要な事である以上、全く無関係とも言えない。

警官は暑に戻って相談してみる、と舞に告げ、改めて鞆と血痕を見つけた場所を尋ねた。

「嘘」

「……………へ？」

「じゃあね」

そう言っ、舞はさっさと公園を後にした。

そして町は、また以前より少し安全になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9824o/>

---

うそつき

2010年12月1日22時19分発行